



受験者(減少)現象

2月12日から22日にかけて、今年も入学試験が行われた。10日間で受験した人数は約11万4千人。入試日の朝は受験生以外にも、上から目線ジェールを送る大手予備校スタッフや無表情で消しゴムを配り続ける謎の中年男性、人で溢れた大学周辺をイライラしながら警備する大学関係者などごったがえしていた。さてこの「11万4千人」という数字であるが、昨年度の受験者数と比較すると各学部軒並み受験者数を減らしており、全体で2千人近く減少している。やはりこの不況では、「記念受験」をする受験生もいなくなったということだろうか。しかしその中で唯一、文化構想学部が去年よりも500人以上受験者を増やした。文化構想学部と言えは週4日のペースで詰め込まれる割に全く持つて実を結ばぬ必修の二外であるとか、教授の自分語りや延々と聞かされるオンデマンド授業、そして向こう5年は終わらぬ予定のキャンパス工事…と負の要素に侵されていることで有名である。にもかかわらず志願者が増えた理由を、文化構想学部の職員に聞いてみた。

- ②「志願者が増えた理由をどうお考えですか」
- ③「そうですね、いくつか考えられます。」

まず、学部を開設して3年以上経ったので認知度が上がっているのではないかとということ。そして、文化構想学部のように歴史学・文学などを横断して学べる場所が他にほとんどないということですね。

②「増えた志願者の分の受験料は何に使う予定ですか？」

③「各学部の受験料は一つのところに集められるので、文化構想学部だけに使われるという訳ではないのですが…建物の工事、教授や学生の研究・学習環境の向上に使ってゆきたいと考えております。」

②「ありがとうございました。」

突然の電話であつたにも関わらず、「入試担当」と名乗る職員はかなり丁寧に回答してくれた。内容が優等生すぎて気持ち悪いことも除けば、100点満点の応対である。この際の低さ、丁寧さが負の要素を上手く隠しているのだろう。受験生の皆様、今更「文化構想学部、微妙かも…」と気が付いてももう遅い。一緒に、工事の騒音とエセサブカル臭にまみれた学生生活を送りましょう。

